

蒼穹を背に

結城 文

踏み入らむとするものありて守りたきものを意識す窓をうつ風

こはごはと然れどもゆづるまじき異説首たてて歩む道のサルビア

蒼穹を背に坂道をくだりくる少年すがしき風とともに来

とどくとは思はねど祈るほかはなく直ぐたつ杉の上の青空

山頂より見おろす海に沿ふ街のなべては夕映えの輝きのなか

碧海のかなたの一点目指しゆく船が曳きゆく一筋の水脈

夏至近き海に沈む日蕩たうとトルコ絨毯のごとき夕焼け

山道を歩ききたりしたかぶりをしづめむと山の落ち水ふふむ

雪解水流れくだれる「三分一さぶいちの湧水」にうちし蕎麦をいただく

平凡といふ強さもて無限回うちかへしゐる磯波の音